

## 京都府立植物園 100 周年未来構想委員会（第 1 回）概要

日時：平成 30 年 10 月 17 日(水曜日)

午前 10 時から 12 時まで

場所：植物園会館 多目的室

【出席委員】秋元委員、金田委員、下村委員、谷口委員、築山委員、並木委員、野中委員、福村委員、藤本委員、前田委員

【事務局】田中副部長、嶋津課長、川崎担当課長、戸部園長、西原副園長、岡垣課長、齊藤課長

### 1. 議 題

- (1) 委員長の選出
- (2) 委員会の設置及び運営について
- (3) 京都府立植物園の状況について
- (4) 北山文化環境ゾーンの整備状況等について
- (5) 意見交換

### 2. 議事概要

- (1) 委員長の選出  
築山委員が委員長に選出された。
- (2) 委員会の設置及び運営について  
「審議会等の会議の公開に関する指針」に基づき、本委員会を公開とすることが決定された。
- (3) 京都府立植物園の状況について  
事務局から説明を行った。
- (4) 北山文化環境ゾーンの整備状況等について  
事務局から説明を行った。
- (5) 求められる植物園のあり方について、論点に従い意見交換を行った。  
論点 1 国内外の幅広い人々を引きつけるような植物園のさらなる魅力向上、サービス向上のためには、どのような機能や取組、施設が求められるか。  
論点 2 北山文化環境ゾーンの立地施設との有機的連携に向けて、どの

ような機能や取組、施設が求められるか。

### 3. 主な意見

- 京都の歴史や文化を今の京都と比較する、歴史を辿る、古の文化に思いを至らすことが好きだと思われる京都府民には、歴史文学に関わりのある植物が根強い人気。
- 北山文化環境ゾーンとして回遊性の高い方向性を目指す議論をしていく必要がある。非常に大きな面積を占める植物園が重要な中心であり、京都を訪れた人が是非来たいという場所になることが大事。
- 研究、教育、質の高い知的な環境を伴う場所として、京都の歴史的な部分とは違う新しいブランドができればよい。
- 京都学歴彩館、府立大学等、学術に関わる専門機関が隣接していることは非常に大きな強みであり、海外の方も含め京都に来られる方が来る前に持っていた京都の歴史文化伝統ではない、新しい魅力を発見する、あるいは新しい魅力に惹かれて訪れる方がさらに広がっていくというところが大事。
- 地元の人が認めて集まるところに、異国情緒を求める外国人観光客も集まる。
- 楽しい取組をやっても、本当に知ってもらいたい一般の人にはなかなか伝わらないため、イベント的な“仕掛け”を行い SNS や広告で発信すればよいと考えている。
- 地元密着型を含めてグローバルに仕掛けを行い、興味を持っていない一般の方に楽しく来てもらうための情報発信が重要。
- 入園者数の目標は植物園の運営が成り立つ数値とすべき。数値目標を設定することで運営の仕方も見えてくる。
- 公園と植物園の違いを情報発信していくことも、植物園を運営する立場の使命かと思う。植物園が持つ標本数や教育・研究、世界中で植物が資源として取引されるということを一般の方はイメージが出来ない。植物が自分達の生活に繋がっているということを含めて情報発信する必要があると思う。
- 古典園芸植物は貴重なものであり、大切にしていく必要がある。
- 人材育成もしっかりとやっていくことが必要。学芸員や研究員を増やす事によって、植物園の格も上がっていくと思う。
- 北山地域は駅から近くて人も多く、魅力的な地域であり、ポテンシャルの高い地域。

- 北山地域を全体的に考え、地下鉄の利便性を活かして、各施設の利用時間を少し遅くし、絵を見たり、コンサートを聞いて9時くらいから植物園の中を散策できるなど、今までと違う夜の時間帯の活用も考慮して開発をすべき。
- 大学とコラボレーションすると、学生達が植物園に何を望むかという声も聞きながら活性化を考えることが出来るのではないか。
- 学生達を巻き込んで植物園をデザインしていくと、ホームページや入退園門、チラシなどのアピール力が変わり、若い人も入りやすい植物園になっていく。
- 北山地域には京都の他の地域とは違い、京都らしくないところがありおしゃれな感覚を活かして北山文化環境ゾーンを、いうなれば「北山パーク」のように、1日楽しめる場所にする仕掛けが必要。そのためには旧総合資料館跡地も含め、植物園、コンサートホール、大学など、それぞれの施設の連携が非常に重要。
- どのように人を集めて楽しい場所にするか、来た人がまた来たくなる、そこでした体験を人に伝えたくくなるような相乗効果があると良い場所になる。
- 北山ゾーン全体で各施設の内側のボーダーをフリーにして、民間の力を借りて、きちんとマネジメントをして、一日遊べるような仕掛けを作ることが必要。そのためには旧資料館跡地の活用がキーポイントであり、植物園もそれを見据えた対応が必要。
- 北山文化環境ゾーンの名称は親しみやすく、来たくなるものにするべき。
- トイレが綺麗な所は絶対に喜ばれる。特に女性が入りやすい綺麗なトイレにすべき。
- 北泉門近くの和風建築もひとつの例だが、「植物園ならではのトイレ」といった演出（トイレに限らず）も集客のポイントになる可能性がある。
- 植物園ならではのトイレが集客のポイントになる可能性がある。
- 研究機能を設置して科研申請ができる研究者を置くことは絶対に必要。
- 「食育」という言葉が流行っているが、植物の「植」とか、生物の「生育」など違う「しょく育」があってもよい。
- 「植物が主役」というこの理念は是非貫くべき。
- 例えばディズニーランドは清掃のスタッフも魅力的であるように、植物園もスタッフの魅力を上げて、植物園の名物スタッフに会いに来るなど、多

くの人が遊びに来てくれる場になったらよい。出張して外に出かけていくというのもよい。

- 時代の変化への対応は外せない。生物多様性の重要性、都会化する日々の生活の中での癒やし、心を休める場所が求められている。その対応を明確に出すことが、より身近な空間になっていくと思う。
- 植物が主役ということを書きながら、AR・VRなど新しいメディアを考えること。ハードをいじめる事のない新しいメディアの取り入れ方が必要。
- 高齢者や障がい者だけでなく、全ての来園者が楽しく利用できる移動手段があればよい。
- ミュージアムショップ、ガーデンショップの充実、オリジナル商品の開発など、他の施設は熱心に行なっており、植物園でも力を入れるべき。学生やデザイナー等とのコラボによる新たな商品開発は十分可能。
- 北山文化環境ゾーンの北西角の土木事務所についても、景観や植物多様性など、土木政策をうまく回していくためのインキュベーション等として取り込んでいくべき。
- 植物園としての研究、調査をしっかり行い、その研究内容をすべてコンテンツとして、それを展覧会とか展示という形で、一般の人に分かり易く見せて、これを発信して、集客に結び付けていく。このサイクルとサイクルが成長するシステムが求められる。
- 京都のこの植物園だからこそできること、あるいは京都のこの植物園にしかなできないことを掘り下げていくべき。
- 小山鐵夫先生が、「植物園とは多くの植物を集め、それらを生きた標本として栽培・保存し、植物学や園芸学の研究と教育に役立たせる機関。」と述べている。植物園として変わらない理念を押さえた上で、変えていくところの検討を進めるとよい。